

〈特集随想〉交友三十余年

久保田, 正文 / クボタ, マサフミ

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

50

(開始ページ / Start Page)

8

(終了ページ / End Page)

10

(発行年 / Year)

1994-07-09

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019755>

交友三十余年

久保田 正文

法政大学の日本文学科へ、兼任講師として私が行くことになったのは一九六〇年からで、それから三年間つとめた。小田切秀雄さんが一年間の外国留学ということになってその留守番ということであった。

一九六〇年は、もちろん六〇年安保闘争の年であるが、私にとってはいろいろ忘れがたいことが多かった。二月十二日には、同人雑誌『前後』の仲間の鈴木清次郎君が自殺した。彼は「日本橋」で、第十回芥川賞の有力候補であった。

安保反対デモに、学生諸君とはじめて参加したのは六月十五日であった。私が前夜の徹夜仕事で疲れた顔をしていたのかもしれない。議員会館前の坐り込みに入った時、小原元君が、あなたは帰っていいよと言ってくれたので、私は引きあげた。樺美智子さんが殺されたのはその日のことであった。

留守番兼任講師ではあったが、大学院のゼミナールもまか

されて、不勉強の私は大いに苦勞した。大学院の諸君は、私よりよほど専門家が多く、〈小新聞〉などという術語を、学生諸君から私が教えられるという具合であった。九段坂上の小料理屋の二階座敷で、ビールを飲む会をひらいてくれて、T・Y君ともうひとり、昨夜二人で練習したといつて、その頃流行しはじめた「黄色いさくらんぼ」という唄を、〈ふん、ふん〉という間の手をうまく入れてうたった。T・Y君は、横山源之助を研究していて、いまはその専門家として多くの著書をもっている。I・K君は森鷗外をやっていて、彼には一九七三年に「大西祝の和歌論」(大正大学『国文学踏査』)を書く時、その全集を貸してもらった。いまは北海道の郷里に帰っているH・M君は、修士論文に永井荷風をあつかって、このH君と、I君とは、一九六〇年度に修士論文を提出し、私が審査にあたったのだから、ずいぶん勇敢な役割

を果したものである。女子学生のK・Kさんは、いま女性問題の運動家として広く名を知られているが、大学院時代から芥川龍之介研究にうちこんでいて、その後芥川論集を編んで、私も書かせてもらったことがある。T・K君は、修士を了えて永く法政に勤めていたが、定年退職後油絵・彫刻をはじめ、昨年個展をひらいて私も見に行った。K・H君は、法政時代のつきあいではなかったが、すぐれた阿部六郎論を私が読んでからの知りあいだ、京都帝大時代に阿部と親しかった矢部堯一氏に紹介したことがある。これらの諸君とは時々会って一杯のむ。昨年の初夏、T・K画伯の発表を祝って、茅が崎海岸の旨い肴を喰わせる店で一杯やった。Y・E君とE子さんの結婚は、すこし後であったようにおもうが、大学院時代から約束された仲であることはみなに知られていて、卒業後は共に法政の高校に教えていたはずで、E子さんは今年退職したと便りをもたらした。彼女は石川淳論にうちこんでいる。話があとさきになったが、忘れがたい一件がある。一九六一年の春ころであっただろうか。T・Y君とT・K君と（他にもいたかもしれない）が、川崎に有名なストリップ劇場があるからと誘われて出かけた。ストリップは、濃厚にやらないと、マジメにやれと声がかかるそうである。その川崎ストリップも余りマジメ組ではなかったような気がするが、とにかく私にとっては初めての、そして数すくないストリップ見物体験であった。

学部のゼミナールをうけもったのは一九六二年卒業クラスと、六三年卒業クラスとであった。六二年クラスにはA・M君がいて、正岡子規を卒業論文にえらんだ。その後現在に至るまで私は、A君に子規や啄木関係の仕事を手伝ってもらっている。卒業すると彼は、ソニーの関係の会社に就職し、今はビデオ関係の会社を創って経営している。彼は、はじめの会社の時職場結婚をして、その結婚式は学生時代の友人や、会社の仲間が集って、会費持ち寄りのパーティをひらいた。「しあわせなら手をたたこう」という愉快なうたが唱われはじめた頃で、皆で掌をうったり、肩を叩いたりして賑わった。A君と同級にM・Aさんがいて、彼女は筑摩書房に就職した。入社試験の成績は優秀であつたらしく、社長の古田晁さんから私のところへ電話があつて、Mさんは労働組合で活躍しそうなひとかと言うので、いや彼女は卒業論文にすぐれた三好達治論を書いているような人柄だから心配ないでしょうとこたえた。

六三年クラスのK・K君は印象が深い。かなりつよい小児麻痺後遺症があつて、言語・歩行に障害があつたが、茅が崎から通いとおした。卒業論文に、よくまとまった芥川龍之介論を提出した。彼は卒業後、身体障害者の施設に働きながら小説を書きはじめ、小谷剛氏から、豊田穰氏までの『作家』の同人になり、作品発表ごとに私に送ってくれた。K君たちの六三年クラスは、まとまりがよくて、I・M君は学生時代

からの恋人として皆が知っていたUさんと、卒業式の日の午後、クラスメートがお膳建てをした結婚式をひらいた。私の夫が即席の仲人ということになった。I君は、朝日新聞の九州支社にずっと勤めている。F・I君とH子さんは同級生で、この二人も卒業後間もなく結婚して娘さんが産れた時、私は名付親になった。たぶん男児だろうというので、法政大学のある富士見町にちなんで、高根という名をえらんでおいた。ところが産れてみたら女児であった。母親のH子さんから電話があつて、女の児でも高根ではどうかと言うので、両

親が賛成なら勿論異議なしだと返事をしておいた。高根さんは、もうとっくに大学を卒業しているはずである。六三年クラスは、四年めごとに集るという約束がきている。四年めというのは、国際オリンピックの開かれる年ということ、その度に私を呼んでくれる。いつも十人前後の集まりで、これまで奈良、広島、天草、糸魚川などへ行つた。それぞれの地に六三年組がいる。三十余年にわたる交友である。(94・4・30)

(くぼた まさふみ・元大正大学教授)

法政大学と故西尾実先生の思い出

水野 弥穂子

私の法政大学の思い出は、昭和三十年ごろから通信教育の指導教員をさせていただいたことから始まります。はじめて指導教員控室という所へ行って見て、その広いこと、多くの立派な先生方が詰めかけていらっしゃるのに驚いたことを覚えております。この指導教員のお仕事も、西尾実先生のお世

話によるものでしたが、ちょうどそのころ、西尾先生は大学院で、世阿弥と同時に『正法眼蔵』の講座を持っておいでになりました。それである時、「ことしは『正法眼蔵随聞記』を扱うから参加してみないか」というお話がありました。もしかしたら、私の方から「ぜひお願いします」と申し上げた